

グリム童話における水と人間についての一考察 ——「語りえぬもの」としての「水の精」——

文学研究科国際文化コミュニケーション専攻博士前期課程2年
高倉 悠希

はじめに

『グリム童話』とは、ヤーコプ・グリム (Jacob Ludwig Karl Grimm, 1758-1863) とヴィルヘルム・グリム (Wilhelm Karl Grimm, 1786-1859) のグリム兄弟によって集められた伝承文学であり¹、正式名称は „Kinder- und Hausmärchen“ 『子どもと家庭のメルヒェン集』²である (以下、『グリム童話』と略記)。兄のヤーコプは言語学、法律学、神話学、弟のヴィルヘルムは主に文学、歴史学等の研究者であり、民族の古い文学的な宝を発掘し、考証し、編集刊行することに共に使命感を持っていた³。そもそも18世紀後半のドイツ前身たる神聖ローマ帝国では、不特定多数の人々が語り継いだ民謡やメルヒェン、伝説の価値を認め、収集しようという機運が高まっていた。フランス支配からの解放戦争もが行われようとしていた激動の時代⁴に、グリム兄弟は民族としての自覚⁵と、失われつつある共通の精神的基盤を、メルヒェンを通して蘇らせようとしたと考えられる。内容や表現等に変更や肉付けはせず、むしろ学問的な客観性をもつらぬく立場で、伝承としてのメルヒェンを、まずは忠実に記録しようとした⁶。そのような意図で収集された『グリム童話』は、最も素朴かつ率直に、民族に固有の感情を伝えている⁷。

本論考では、メルヒェン世界と現実世界とが、昔も今も密接に関わっているという観点に立ち⁸、『グリム童話』の数あるモチーフ⁹の中でも、「水」(Wasser) というものがいかなる役割を果たしているかを検証する。ここでいう水は、いわゆる液体としての水だけでなく、水に関わる場所すなわち「川」、「海」、「湖」、「泉」等をも広範囲に指し示し、登場人物の生死を含むその後の運命に、これらが決定的な役割を演じている。それだけではなく、「水」に関わる諸領域は、言葉を話す動物 (魚) や「水の精」といった超自然的存在¹⁰が住む、現実世界とは違う、いわゆる「異界」¹¹としても捉えられる。この異界は、スイスのメルヒェン研究者マックス・リュートイ (Max Lüthi, 1909-1991)¹²の示す、昔話の「次元性」という「彼岸」(Jenseits) の特性と、相通ずるものがある。この世のものである「此岸

者」と、この世のものでない「彼岸者」が、特に隔絶されることなく同じ次元に存在するというわけである。以下、リュートイのメルヒェン論と、ドイツの哲学者ルドルフ・オットー (Rudolf Otto, 1869-1937)¹³の『聖なるもの』(Das Heilige)を手掛かりに、『グリム童話』の「水」及び「水場」の特性を明らかにする。その際に、ドイツ文学史における水の女と陸の男の二元論を詳細に検証した、小黒康正の見解にも触れていく。

1. グリム童話の「水」

本章では「水」に関わる単語が、『グリム童話』第7版決定版¹⁴に何種類登場するか検証する¹⁵。第7版の通し番号は200までだが、151番目のアステリスクを本論考では重複とみなし全201話とする。さらに、付随する「子どものための聖人伝」(Kinderlegenden) 10話と合わせ、211話という総数で考える¹⁶。また、「水」を表す語は Wasser のみではないため、自然界にごく普通に存在する無色透明の液体を軸に、環境、気候、設備、超自然的存在等も水に関連する言葉として、単語レベルで探し出すことを目的とする。なお、表記には通し番号(KHM表記)¹⁷を用いる。

1-1.出現種類

さて、水に関する表現は全211話中101話¹⁸に見つかった。つまり、『グリム童話』全体のほぼ半数であるが、言葉の種類も大変多いことが、下記の表のごとく明らかになった。KHM19, 47, 68, 91, 96, 113, 126, 138は方言で収録された話のため、番号と単語にカッコ表記を付した。

1	kühlen Brunnen, Wasser	(96)	(Water, an den/ dat Water, Brunnen, Water)
3	Stürme, regnen, Schnee, Eis, harte Eis, regnen	97	das Wasser des Lebens, Brunnen, Meer
4	Wasser, Bach	100	Wasser, tiefste Wasser
5	Brunnen, Wasser	101	regnete, Wasser, Brunnen
6	Meer, Brunnen, Wasser, auf hohem Meere, auf dem Meer	106	Mühle
10	Bach, auf dem sie hinab	107	Bach, Wasser, Ufer, Wasser springen, ein Strahl von Wasser,

11	regnete, ein Brunnlein, eins, alle Brünnen im Walde, ein Brunnlein, der nächsten Quelle, Wasser	111	vor dem Wald sei ein grosses Wasser
13	Wasser, Schnee, gefrohren Fluss, das Eis, die Gosse	(113)	(ein grot Water)
15	Wasser, an ein grosses Wasser	114	wie ein Fisch im Wasser
16	das Meer	116	alter wasserleerer Brunnen, Brunnen
17	an einem fliessenden Wasser, ans Meer, aus dem Meeresgrund, aufs, Wellen	119	die antreibenden tiefen Wellen, Ufer, Wasser
18	an einen kleinen Bach, das Wasser, in den Bach, ins Wasser	121	Flusse, Fluss, ein klarer Bach, Wasser des Leben
(19)	(Water, Water, See, Blügen, Storm)	124	regnen, der Regen
20	das Wasser	125	in der grossen Nordsee
21	der Schnee, begossen	(126)	(Water, Water, Water)
23	Wasser	127	ein grosses Wasser, vor ein grosses Wasser
24	bei einem Brunnen, schneit, wie Schneeflocken, der Goldregen	129	Meer, auf dem weiter Meer
25	Taufwasser, Quelle, Brunnen	132	vor dem Wasser
28	Bach, mitten über dem Wasser	134	rote Meer, ans Wasser, die Wellen, ganze Meer, erstartt, Meereswasser
29	Wasser, Gewitter, Marktbrunnen, Wasser, an ein grosses Wasser	135	ein tiefes Wasser
30	das Brunnlein/ Brunnchen, Wasser	136	von einem tiefen Pfuhl, Wasser, Brunnen, Goldbrunnen, Wasser, begiessen, böses Wetter, wie ein Wetter
31	Mühle, Wasser, Schleuse, an einem Bache	137	See
36	so regnete, Platzregen	(138)	(groot allmächtig Waater, Wiegewaater)
37	die Gosse	141	ein Teich
40	Wasser	145	einen Trunk
42	Wasser, ein wunderbares Wasser	147	Wasser
45	Dampf	149	an einem stark angeschwellenen Bach, Wasser
(47)	(de Snee, Mähl)	150	Wasser, Bächlein

50	im Bade, aus dem Wasser	152	Weltmeer, Wasser, Flüsse, Meer
51	Wasser, Brunnen, wenn's im Kessel siedet, Teich, ins Wasser	158	Rhein, wie Wasser, aus dem Wasser
52	Wasser	159	Rhein, schwammen, auf dem Eis
53	Schnee	161	die Flocken, Bach, Wasser, hinein
56	See, ans Ufer	165	Wasser, Wasser, Wasser, Wasser
57	Badenhaus, baden, Brunnen	166	Meer, Meersstrand
61	Wasser	170	Wasser
64	mit Wasser, das kalte Wasser, zu Wasser	171	Mühle, Mühle, Sümpfe
65	Wasser	172	Fluten
(68)	(Water)	178	Wasser, begossen, Lauge, Wasser aus einem Brunnen, Regen
71	aus einem weit abgelegenen Brunnen, Wasser, verschmachtet, Frisch	179	Brunnen, Bach, Wasser, wie Schnee
76	bei einem klaren Brunnen	181	die Nixe im Teich, aus dem Wasser, die Nixe des Teichs, Wellen, Regen
79	die Wassernixe, Brunnen, hinein, uneten, Wasser	182	ein eisgrauer Bart
80	Brunnen/ Born, Wasser, an einen Bach, am bach, darüber, ins Wasser, ertranken, an das Wasser	183	Wasser, Quelle, Brunnen
81	ein grosses Wasser, Wasser, Wasser, half ihm hinüber	186	Teich, Wasser
83	nicht saftig	191	das Meerhäschen, an den See, der Tiefe herauf, Quelle
85	beim Wasser, ins Wasser, Goldfisch	193	an einen See, Baden, See
88	zum roten Meer, Meer	195	das Wasser bis an den Kopf geht
89	Wasser aus dem Bache, ans Wasser, über das Wasser im Bach	197	tiefen Meer, Wasserstrahl, Quelle, in das Meer, Ufer, haushohe Wellen
90	Brunnen, Mühle	200	Schnee
(91)	(Dampet, deepen Born, Water)	201	klar Wässerchen
92	Meer	206	Wasser
94	kein Wasser		

まず頻度順では、Wasser（水）が67話¹⁹に見られ一番多い。また、「聖水」と記しうる語がKHM25「七羽のからす」で Taufwasser、KHM201「森のなかの聖者ヨーゼフ」では Wässerchen²⁰という表記で見つかった。KHM97「命の水」、KHM121「恐れ知らずの王子」では、Wasser des Lebens（命の水）という出現もあった。ちなみに Wasser は、「水」という意味で使われているだけでなく、小川や川、海、湖、泉といったものを表す際にも頻繁に登場した。例えば、KHM50「いばら姫」での aus dem Wasser という表現は、広義では「水場から」となるが、「川から」とも「湖から」とも解釈できる。また、KHM145「親不孝なむすこ」では Trunk（水を一口）が使われていた。KHM21, 136, 178の3話では、「植物に水をやる」begiessen が見られた。

次に多いのが、後述する水域のカテゴリーとなるが、Brunnen（井戸または泉）²¹であり、23話に登場した²²。KHM11「兄と妹」では Brunnlein（小さい井戸）、KHM29「金の毛が三本ある悪魔」では Marktbrunnen（市場の井戸）、KHM136「鉄のハンス」では Goldbrunnen（金の泉）が登場していた。

水域としては Meer（海）または die See（海）が登場し、Meer は KHM6, 16, 17, 88, 92, 97, 129, 134, 152, 166, 191, 197の20話に見られた。KHM17「白へび」では、Meeresgrund（海の底）が登場している。die See という表現は KHM(19), 125の2話に見られた。Bach（小川）と Fluss（川）について、Bach は KHM4, 10, 18, 28, 31, 80, 89, 107, 121, 149, 150, 161, 179の13話で見られた。KHM150「物ごいおばさん」で Bächlein という表記も見られた。Fluss は KHM13, 121の2話に見られた。また、KHM158, 159の2話では Rhein（ライン川）が登場する。

次に、天から降り注ぐ「水」としては、天候の Regen（雨）があり、KHM3, 11, 24, 36, 101, 124, 178, 181の8話で見られた。KHM24「ホレおばさん」では、Goldregen（金の雨）という表記も見られた。Quelle（泉）は、KHM11, 25, 183, 191, 197の5話に存在した。Schnee（雪）、Flocken（雪片）も見つかると、Schnee は KHM3, 13, 21, 24, 47, 53, 179の7話に見られた。また、Flocken は KHM24「ホレおばさん」に登場し、Schneeflocken（雪の花）という表現が KHM161「雪白と紅ばら」に見られた。

der See（湖）は、KHM56, 137, 191, 193の4話で見られた。Teich（池）、Pfuhl（沼）、Sümpfe（沼地）について、Teich が KHM51, 141, 181, 186の4話、Pfuhl が KHM136「鉄のハンス」、Sümpfe が KHM171「みそさざい」に登場した。Ufer（岸、あるいは海岸）もまた、水域関連と見なしうる。Ufer は KHM56, 107, 119, 197の4話に登場し、KHM166「強力ごうりきハンス」では Meeresstrand という表記であった。

Welle（波）も水の一部として言え、KHM17, 119, 134, 197の4話に見られた。「水」の変化したものとなるが、Eis（氷）が KHM3, 13, 159, 182の4話に見られた。さらに Mühle（水車）、Gosse（下水溝）、Schleuse（水門）も見つかった。概念というもので一概に多いとは

言えないが、Mühle がKHM31, 90, 106, 171の4話に、Gosse がKHM13, 37の2話に、Schleuse がKHM31「手なしむすめ」に登場する。

また、Bad (湯殿) がKHM50, 57, 193の3話に登場し、KHM57「金の鳥」では Badenhaus の表記も見られた。Fisch (魚) はKHM85, 172, 191の3話に見られた。なお、KHM191「あめふらし」Das Meerhäschen という表記もあり、物語の中で、これはかたつむりを意味すると記されていた。また天候を表すStrum (嵐) もある。StrümはKHM3, (19) の2話で見られた。

次にいわゆる「水」の超自然的存在として、Nixe (水の精) を挙げるができる。KHM79「水の精」Wassernixe、KHM181「池にすむ水の精」Die Nixe des Teichs の2話に見られた。KHM181では die Nixe という単語だけが使われるのではなく、毎回2格が補われる形で登場している。

Dampf (湯気) という語はKHM45, 91の2話に見られ、saftig (汁気) は、KHM83「かほうにくるまったハンス」で nicht saftig (汁気が足りない) と牛肉が自分にとって汁気が足りないという場面で使われていた。最後に、KHM172「かれい」ではFlute (洪水) が登場していた。なお、Wasserの造語となるが、KHM107, 197の2話には「噴水」という意味で、ein Strahl von Wasser (KHM107) , Wasserstrahl (KHM197) が見られた。

以上、まず単語レベルではあるが、「水」には川、海、湖、泉、沼等水域を表す単語、井戸、水車、水門等の設備、また動物や水の精等、多岐にわたる種類の語句が登場していることが明らかとなった。

2. 水場の役割と機能

前章では、水の役割と水場の機能に関わる単語をテキストから探し、出来るだけ頻度の高い順に分類した。第2章ではそれらが、物語の中でどのような役割を果たしているのか、その機能に即して分析する。

2-1. 機能としての「水」の分類

「水」及び「水場」には、多様な役割または機能が存在する。天候や水域、設備等がそれにあたる。もしくは、「水」や「水場」に関する比喩表現や慣用句等が登場することもあるため、それについても言及する。

2-1-1. 天候

例えば天候の中には水分を伴う現象として、雨、雪、霧雨、雷雨等が考えられ、郷土や季節によっては風雨現象としての嵐も見られる。KHM3, 11, 13, 19, 24, 29, 36, 132, 161, 178, 181の11話に Schnee (雪)、Regen (雨)、Sturm (嵐) といった、天候に関連する言葉が見

られた。KHM3「マリアの子ども」では主人公は嘘の罰として、乙女マリアに我が子を取りあげられ、それが理由で、夫である王子に火刑にされる。しかし、直前で嘘を認めたことで、雨が降り助かるため、雨は救済の機能を果たしている。KHM24「ホレおばさん」では、井戸の中の地下世界にすむホレおばさんの家でベッドメイキングをすると、人間界に雪が降ると記されている。

他にも、主人公の問題を解決する場面に、水分を伴う天候がいくつか見られた。KHM161「雪白と紅ばら」では降雪のため、救いを求めて熊が主人公の家を訪ねる。熊が後の結婚相手となり、ここでの降雪は運命の出会いの機能を担っている。

2-1-2. 水域、設備

水域、設備に関わる言葉として、Meer (海)、Bach (小川)、Fluss (川)、Quelle (泉)、die See (海)、der See (湖)、Teich (池・沼)、Rhein (ライン川)、Gosse (下水溝)、Welle (波)、Brunnen (井戸もしくは泉)、Mühle (水車)、Schleuse (水門)、Bad (湯殿) を、改めてあげることができる。

See という単語は男性名詞の場合は湖、女性名詞の場合は海の意味となる。Wasser という単語も前置詞との関わりから、流れを伴う「川」の場合や、静的な「泉」や「池」、「沼」の場合もある。

特に Brunnen という言葉は23話に用いられ、「井戸」が登場人物の生死に影響を及ぼしていると思われる話が4話²³ある。さらにKHM24「ホレおばさん」では、ホレおばさんが暮らしている世界が井戸の底に存在していたり、KHM91「地もぐり小人」では深い井戸の底に3つの部屋が存在したりと、「井戸」が異界への入口のような役割を担っている。井戸は地下世界であり、土には死者が埋葬されることもある。したがって、地下世界を生者のいない死者世界と考えることもできる²⁴。とはいえ主人公であれば、死者世界（異界）から何らかの試練を克服して生還するのである。

2-1-3. 比喩、慣用表現

比喩表現等はKHM36, 101, 114, 136, 158, 179, 195の7話に見られた。KHM36「テーブルよご飯の支度、金のろば、棍棒よ袋からでろ」とKHM101「熊の皮をきた男」では regnete で「～が雨のように降った」という表現が見られた。

KHM195「墓丘」では、das Wasser bis an den Kopf geht (水が頭まで来たようなもの) という、絶体絶命の時に使われる慣用表現が使われている。

2-1-4. 飲み水と浴びる水

KHM11, 23, 40, 42, 45, 52, 53, 57, 64, 65, 145, 170, 178, 193, 201, 206の16話が存在した。

飲み水は、主人公たちの暮らしの場面での登場が多い。KHM42「名付け親」での ein Gläschen mit Wasser（水の入った小さなコップ）や、KHM65「千枚皮」での da trug es Holz und Wasser（薪や水を運んだり）等、登場人物が井戸から水を運んだり手桶に水を汲んだり、飲料水として水を飲むために登場した。物語への影響はさほど見られないが、水を飲むことは生きるための手段と見なさう。

KHM11, 42, 97, 121, 179の5話では、飲む行為や浴びる行為をすることで効果が発揮される特別な水が見られた。KHM11「兄と妹」で魔女が3つの泉に、その水を飲むと動物になってしまう魔法をかける。森の中を進むと泉が1つずつ登場し、1つ目と2つ目は飲まず耐えられたが、3つ目に主人公の兄が耐え切れず飲んでしまう。すると、彼の姿が鹿になってしまうが、魔女が物語の最後に死ぬと、魔法は解かれ元の姿に戻る。KHM42「名付け親」では、ein wunderbares Wasser（不思議な水）が出てくる。これを飲んだ病人は快復し元気になるが、もし足のほうに死神がいると快復しない。KHM97「命の水」では、飲んだ者は体が元気になるdas Wasser des Lebens（命の水）が登場する。特別な水も、「生きる」という方向に人を向かわせているのである。

2-1-5. 水に関する課題

『グリム童話』の中には、主人公が魔女や悪魔等超自然的存在や、国王等から課題または試練を与えられる話が多くある。この課題に合格し乗り越えたものは富や幸福といった幸せを与えられ、乗り越えられなかった者には反対に、不幸が訪れる。

水に関する課題も存在しており、KHM13, 17, (113), 134, 186, 193の6話に見られた。例えば、KHM113「王さまの二人の子ども」では、国王から渡されたガラスのシャベルを使って、池のかえほりを一夜で行うよう命じられる。また、KHM17「白へび」では国王によって、海に落とされた金の指輪を探し出すよう命じられる。このように、「水」を伴う様々な課題が主人公に与えられるが、超自然的存在の力を借りる等して、彼らは乗り越えていくのである。

水に関する課題は、池のかえほりを命じられるものが3話（KHM113, 186, 193）、海の中から指輪を見つけ出すものが2話（KHM17, 134）、凍っている川で氷に穴をあけ、糸をすすいでくるよう命じられたものが1話（KHM13）見つかった。

敵対者あるいは援助者としての存在である超自然的存在は、魔女や精霊、小人等様々ではあるが、水に関する存在は、KHM79「水の精」とKHM181「池にすむ水の精」の2話に登場している。

主人公もしくは登場人物が、泉あるいは池の中に入ったところを捕まえてしまうのが水の精であるが、捕らわれていたのが主人公であれば、無事に逃走することができる。この「泉、池の中で捕らえる」という点について、「水の女」という系譜からいくつか気になる要

素が見つかったため、水に関する環境、設備と共に、第3章で細かく考察していく。

援助者としての超自然的存在は、井戸にすむホレおばさんが挙げられる。彼女は良い子には好意的だが、悪い子には敵対的である。KHM1「かえるの王さま」やKHM50「いばら姫」のかえる、KHM19「漁師とその奥さん」やKHM191「あめふらし」の魚は言葉を話し、主人公を助ける。

2-2. 生死に関わる水場

物語の主人公及び登場人物に、「水」は大きく影響を及ぼす。ただし、主人公以外の人間の場合、あるいは動物の場合は死に至ることが大変多い。

2-2-1. 殺害の場としての水

『グリム童話』では殺意を持って井戸、川、海に落とされることが多い。主人公だと死ぬことはなく、主人公以外だと死んでしまう。主人公が動物の場合、殺意が介在しないこともある。

KHM57「金の鳥」では、主人公である王子が2人の兄の目論見によって、井戸の淵に腰かけた時、井戸へ落とされてしまう。しかし、幸運にも井戸が枯れていたことで、王子は命を落とさずにすむ。KHM116「青いあかり」では、兵士が魔女に頼まれて、古い井戸に落とってしまった青いあかりをとるために、かごにのって井戸の底に降りる。あかりをとり、上まで上げてもらうも魔女の悪だくみによって井戸へと落とされてしまうが、その井戸が枯れていたため、けがをせずすんだ。

KHM29「金の毛を3本もつ悪魔」では、川に落ちても主人公は死ななかった。国王が、将来自分の娘と結婚するだろうと予言された赤ん坊を殺害するため、川へ流そうとする。その際、赤ん坊は箱に入れられて川に投げ捨てられたため、箱のおかげで赤ん坊は生きることができた。

KHM13「森の中の3人の小人」では、主人公の娘が国王と結ばれ子供を産む。それを継母と継子に恨まれ、宮殿に忍び込んだ2人に川へ投げ落とされて死んでしまう。しかし、夜中に下水から白い鴨の姿で娘は現れ、国王の剣の力によって生き返る。KHM135「白い花嫁と黒い花嫁」でも、主人公の花嫁が川に突き落とされ命を落とす。しかし夜中に白い鴨の姿で現れ、王様によって首を切られて、元の姿に戻り、生き返ることができた。

2-2-2. 刑罰、戒めの場としての水

KHM16「3枚の蛇の葉」では、主人公を殺した罪でその妻が共犯者と共に、穴のあいた船に乗せられ、最終的に海でおぼれ死んでしまう。

KHM165「怪鳥グライフ」では主人公が姫を嫁にもらうため、国王から命令され怪鳥グラ

イフの元へ向かう。その途中の川の、川越し役の男に、どうしたら自分が川越しの仕事をやめられるか、グライフに聞いてきてほしいと頼まれる。グライフは、誰かが来たらそいつを川の真ん中へ降ろしてしまえ、と答えた。頭のいい主人公は彼に伝え、途中で得た財宝をグライフからもらったと、国王の前で偽る。欲を出し、かつ、娘を嫁にやりたくない国王が、自らグライフの所へ向かう。やってきた国王を川越し役の男が川の真ん中へ降ろし、国王は死んでしまい、主人公は姫と結婚できた。

2-2-3. その他の運命を担う水

KHM101「熊の皮をきた男」では、娘が男と結ばれ、それを知った娘の2人の姉が怒り狂い、姉の1人が井戸に身を投げおぼれ死んでしまう。

KHM61「水のみ百姓」では、川に映った小さな綿雲を羊と勘違いした百姓たちが、川へ飛び込みおぼれ死んでしまう。KHM80「めんどりの死んだ話」では、おんどりが川の向こう岸まで着き、森の動物たちがのった車も引こうとしたものの、あまりにたくさん乗っているため車が後戻りしてしまい、全員川に落ちて死んでしまう。

KHM166「^{ごうりき}強力ハンス」では、主人公のハンスが美しい娘を助けるため海へ飛び込み死にかけた際、大気の精によって助けられ、おぼれ死なずにすんだ。

このように、『グリム童話』に登場する人物たちは現実世界と同様、「水に入る＝死」が前提となっている。「泉」や「湖」、「池」には、超自然的存在である水の精が現れることもあり、主人公らを水の中に引き込むが、殺そうとはせず、ただ水の中に留めおく。登場人物は物語の最後には、陸の世界へと帰ってくるのである。彼らが入った「水（場）」というのは、物理的に考えれば死者世界となりうるが、本来的な死には至ってはいないことから、生き返ることを前提として入っていく「一時的な死」の空間とも言えるのではないか。そしてそこに、ほぼ必ずと言っていいほど水の精が介在しているのである。

3. 「水の精」と「水の女」を考える

「水の精」を「水の女」という言葉で表す小黒康正に依拠すれば、「水の女」の始祖は古代のギリシアの神話、セイレン²⁵と呼ばれる半人半鳥であった。その後、キリスト教の元で変容し、中世ならびにルネサンス期の民間伝承や民衆本を経て、近代ドイツのメルヒェンにて川幅を広げ、世界文学という海原へと流れ出ているという²⁶。この「水の女」の文学的系譜は、「両性の戦い」を基軸に人間存在と自然存在、人間界と異界、陸と水、固定化と流動化、合理と非合理、夫権制と母権制といった、ヨーロッパの思想や文学に顕著な二項対立から読み解かれることが多いという²⁷。「水の女」というのは、人間悟性の範疇に収まらない非人間的存在であるという意味で、人間には否定的にしか認識されえない「他者」（＝認識で

きぬもの)であり、人間の悟性的認識に対応する悟性言語では本質を衝くことができぬ故、否定的にしか表現できない「他者」(=言語にならざるもの)というのである²⁸。

セイレンは美しい声を武器に、ホメロスの『オデュッセイア』²⁹の主人公、勇士オデュッセウスと対峙する半人半鳥の神話的存在だった。そしてセイレンは、美しい歌声を持ち合わせ、知的な歌詞で人間の男を誘惑した。しかし、古代ギリシア文学がキリスト教と混淆していく過程で³⁰、セイレンは半人半魚へと姿を変え、キリスト教の異教や異端という外なる敵として、またはキリスト教内の色欲の具現へと化してしまった。それゆえ、美しい声と知性は欠落し、代わりに美しい姿という視覚的要素を手に入れた³¹。その後セイレン娼婦説等、見せかけの美と背後の死のみが強調されていく。これが小黒の「水の女」の出自についての考えである。

中世末期に至るまで、「水の女」の文学的系譜は明らかではなかったが、12世紀から16世紀の400年間に変遷を遂げ、異類婚姻譚や民話的要素、歴史的要素をもって成立した。「水の女」はキリスト教の外なる敵でも内なる敵でもなく、劇的にキリスト教化された人間の姿で現れ、主にフランス語圏でメリュジーヌ³²、ドイツ語圏でウンディーネ³³という名を持つに至り、系譜が二極化したのだった³⁴。人間存在に対する物質存在(=水の女)は、魂を持たない存在であるが、人間の男と結婚することで魂を獲得され、そのような水の女の物語「ウンディーネ」はロマン派時代のドイツ語圏で特に愛好された³⁵。

人間と超自然的存在、「他者」(=「水の女」)は、自然と対峙する人間の原初的な「戦いの物語」であったが、時を経て、人間存在の魂を希求する、対人間存在としての物語に変化した³⁶。いずれも水の女が陸の男を誘惑、もしくは魅了するという点で共通している³⁷。そしてドイツ文学において、「水の女」の系譜は「外なる異界」や「未知なる他者」のみならず、「内なる異界」や「未知なる自己」をも取り込みながら、「水の深さ」が「心の深さ」となる現代的な「他者」経験を問題にしていくというのである³⁸。「内なる異界」や「未知なる自己」というのは、自分が気付いていない己を指している。

以上をふまえ、改めて『グリム童話』に話を戻す。

まずKHM79に登場する水の精だが、「水の女」が持ち合わせているという「美しい声」、または「美しい姿」等、物語内での記述はない。そして、この話の中で水の精は、兄だけでなく妹も捕らえている。本来、「水の女」は人間の男のみを誘惑、魅了する存在であるにも関わらず、女である妹まで捕らえているのは疑問に感じる。

ただ、兄妹が水の精に捕まってしまうのは、水の精が歌ったことが原因ではなく、兄妹が泉の近くで遊んでいる際、誤って落ちてしまうことが原因である。つまり、兄妹が水の精に魅了されて泉に入ったわけではない。それゆえ、水の精が人間を魅了するために必要な、美しい声や姿であるという記述がないのではないかと考える。

また、この話の水の精はまるで敬虔なキリスト教徒のように、日曜日に教会へ礼拝に行っ

ているのである。「水の女」の系譜では、古代のギリシア神話とキリスト教が混ざり合ったことで、「水の女」が歌声を奪われ大きく変容を遂げた。よって、「水の女」の行動自体がキリスト教化していてもおかしくはないだろう。

また、兄妹が水の精から逃走する時、「櫛」と「鏡」を使用する。追いかけてくる水の精に向かって投げると、「櫛」は歯のある大きな山へと変わる。水の精がそれさえも乗り越え、さらに追いかけてくると次に「鏡」を投げた。すると「鏡」は鏡の山へと変わり、水の精はこれをすぐには乗り越えられず、その間に兄妹は逃げる事ができた。これら2つの道具は、娼婦の持ち物とされていたものだという³⁹。古代ギリシア文化とキリスト教が混淆していく中、ルターが訳した1483年ドイツ語聖書の挿画にて、半人半魚のセイレンが櫛と鏡を持ち、まるで娼婦のような姿で描かれているのだ。これらの道具が物語内で登場しているということは、このメルヒェンはやはり少なからず「水の女」の系譜の影響を受けているということだ。

KHM181「池にすむ水の精」では、池に住む水の精は美しい女として現れる。それは、「水の女」の持つ視覚的魅力として「美しい姿」にあてはまる。そして、水の精は主人公の父親に優しく話しかける。声が美しいかどうかまで、物語の中では書かれていないため、実際彼女がどのような声を出したのかは分からないが、「水の女」の持つ聴覚的魅力の効果がないとも言いきれない。また、粉ひきの名前を彼自身が明かしていないにも関わらず、水の精は彼の名前を知っている。そして、助けてあげる代わりに水の精は、父親が家に帰った時に生まれたもの（後に息子と判明）を望む。過去であれ未来であれ、この世の出来事すべてを知りうる超自然的な能力、彼女が粉ひきの名前と息子の誕生を予知したことが明らかである。これらにより、「水の女」の持つ知性的魅力が話の中に組み込まれていることがわかる。

後に主人公である息子は水の精によって捕らえられるが、その際この話も水の精が歌ったり姿を見せたりしたわけではなく、自ら池に近づいたところを水の精によって中に引き込まれてしまった。

このようにKHM79もKHM181でも、「水の女」が持っていたとされる、聴覚的魅力は欠落してしまった可能性が考えられる。しかし、どちらの話も視覚的魅力と知性を有する、「水の女」の系譜の一部であることは明らかだろう。

4. 「聖なるもの」と「水」との関わり

本章では、ルドルフ・オットーの『聖なるもの』に寄り添いながら、「水の女」を考える。人間は自分自身の中で限られた不十分な形で自覚しているような人格的・理性的要素を、神に当てはめて考え、これらを概念として明瞭に思考の対象にすることができるという。それを仮に「合理的」と呼ぶならば、そういう用語で言い表される神の本質も、合理的なものと呼ぶべきだが、その対象はまぎれもなく非合理的なもの⁴⁰に他ならない⁴¹。「聖なるもの」⁴²と

というのは合理的なものとは無縁であり、オットーによれば「語りえぬもの」である。なぜなら、概念的把握を全く寄せ付けないからである。人間悟性の範疇に収まらない、非人間的存在「認識できぬもの」である「水の女」は、小黒康正によれば否定的にしか表現できない「言語ならざるもの」であり、つまり「聖なるもの」の定義の一部を権威しうるといっても過言はない。

我々が便利に使用している「聖なるもの」から、神観念の理解のために、人間が用いる「限られた不十分な形」の「人格的・理性的な要素」という合理的要因を差し引いたものに、「神靈的」ないし「ヌーメン的」を意味するドイツ語の *numinös* (ヌミノース) という語をオットーはあてはめた⁴³。「ヌーメン的感情」は、ヌーメンの対象に遭遇した時、その場のみ生じる不思議な感情反応を通じて知ること、または恐ろしいもの等を通して間接的に知ることでもできる。「おそれ」や「不気味さ」は、日常の自然的なレベルでの体験領域に属さない、自然的なものとは無縁の範疇の最初の評価価値である。いわくいいがたい不思議な感動を「被造物感情」(*das Kreaturgefühl*) という。他者に伝える際、自分自身の中で感情反応を思い出し、それを手掛かりにするという間接的手続きを通じてでしか、知らしめることができない。それは、主観内の付随要因・作用に過ぎず、ある別の感情要因のいわば投影にすぎない。そのようなそれ自体が非合理的なもの、客観的に感得される強大なもの、いかなれば間接的ではあるが、合理的な表現を介しては説明できない感情要因を「ヌミノーズ」という⁴⁴。

ホメロス『オデュッセイア』によれば、セイレンの周りには人間の白骨がうず高く積まれた恐ろしい「死」の風景があり、このセイレンにはオットーの言葉を借りると、「戦慄すべき」⁴⁵が当てはまる。「戦慄すべき」には、「撥ねつけるようなもの」と「魅了するようなもの」の、相反する2つの要因が存在する⁴⁶。恐れを抱きつつも引き寄せられてしまうのは、それに対し「ヌミノーズ」を感じ、所有したい、またはそれで己を満たしたいと思うからである。ヌーメンを内にすまわせることで自己が満たされ、この体験で魂を満たし安らぎを得ることに魅せられる。それゆえ、「オデュッセウス (=陸の男)」は「セイレン (=水の女)」に恐ろしさを感じつつも魅了されてしまうのである。

また「陸の男」は、「水の女」が出自とする「外なる自然」と人間の内奥という意味での「内なる自然」を介在させ、人間悟性の及ばないもの、根源的なものと深く関わるという。小黒康正が引用している、1778年ゲーテが書いた『漁夫』(*Der Fischer*) は、漁夫が「水の女」の歌声によって自ら水の中へ沈んでいく詩だが、「水の女」は姿を現しておらず漁夫は彼女の歌に誘われ、水面に映る自分の顔を見る。それは、水底から現れた「他者」であり、同時に心底から現れた「自己」であった。つまり、視覚化できる「外なる自然」を通じて、視覚化できない「内なる自然」に出会ったのである。こうして「水の女」は、「水の深さ」が「心の深さ」となる、認識しがたい「他者」表象となっていく⁴⁷。それは、認識できぬ

「未知なるもの」や「悟性」の光が届かぬ「異界」で、「陸の男の自己」の自己にやどる「他者」なのである⁴⁸。

おわりに

以上の考察から、「陸」という空間と「水（場）」とは物質的には同質であり、両方ともこの世あるいは日常空間とも言えはする。しかし「水（場）」は精神的には、現実世界とは違う異世界、あるいは死者世界としての異界であるだけでなく、内なる自己へと入るための扉のような役割を担っているとも考えられる。水への侵入が、他者のような自分あるいは別の自己との出会いを提供しうると共に、外的環境としての水であるものが、実は心的内部にも存在しうるという意味で、お互いがお互いを取り巻いているとも言える。メルヒェン（昔話）の空間性について、リューティは一次元性なるものを以下のごとく説明した。

昔話では話をする動物のような非現実的なものに出会っても別に驚いたりはず、主人公にとってすべては自分と同じ次元に属しているように見えている。昔話では彼岸者は外的には人間から遠隔の地にあり、精神的及び体験上では人間に近いところにある。単に外的に遠いだけで、精神的には遠くない。昔話でも此岸的人物と彼岸的人物は区別されるが、彼らはお互いに接して存在しており、此岸者は彼岸者の中に別な次元を感じる感情を持っていない。⁴⁹

もちろん、『グリム童話』では水に落ちると登場人物が必ず死んでしまうことから、「水（場）」は「彼岸」(Jenseits) であるだろう。しかし、「水の女」という異界の存在、ヌミノースを通して異界へ入ることで、ヌミノースとの一体化、さらに「内なる自己」と出会うことができ、死を回避できる。特に、KHM181「池にすむ水の精」で主人公が水の中へ入ったことはそのような水の精によるものであるため、ただ単に異界へと移ったのではなく、曰く言いがたい内なる自己の世界へ入っていったともみなして差し支えないのではないだろうか。

¹ 1812年に第1巻第1版が、1815年に第2巻第1版が刊行される。その後、差し替え、改編が行われ版が重ねられた（第2版1819年、第3版1837年、第4版1840年、第5版1843年、第6版1850年）。1857年に刊行された第7版で改版は終わるため、この版は決定版とされている。

² ドイツ語の「Märchen（メルヒェン）」はそもそも「知らせ（mære）」に由来する言葉で一義的に「童話」を指しているわけではなく、「民話」、「昔話」、「おとぎ話」等の訳語があてはめられることもある。メルヒェンとはこのように多様であるため、本論ではメルヒェンと統一して表記し

ていく。大野寿子編『カラー図説 グリムへの扉』、勉誠出版、2015年、73頁参照。

³ 日本児童文学学会編『グリム童話研究』、大日本図書株式会社、1989年、11頁。高橋健二『グリム兄弟・童話と兄妹』小学館、1984年、88-89頁。

⁴ ロシア遠征に失敗したナポレオン1世らフランス軍に対し、ドレスデンの戦い（1813年）やライプツィヒの戦い（1813年）を開戦、1814年にはフランスに進攻しパリを占領。

⁵ 高橋健二（1984）89頁。

⁶ 日本児童文学学会（1989）12頁。

⁷ マックス・リュートイ（小澤俊夫訳）『ヨーロッパの昔話 その形と本質』、岩波文庫、2017年、16頁。

⁸ マックス・リュートイ（2017）17-20頁。

⁹ 例えば、論者の卒業論文は『グリム童話研究 一太陽・月・星の役割と錬金術-』である（東洋大学文学部日本文学文化学科2018年12月提出）。『グリム童話』に登場する、太陽・月・星のモチーフについて、占星術と錬金術の方法論を用いて研究を行った。星々が輝く天界と私たちが住む人間界には、たとえどんなに遠く離れていても必然的なつながりがあるとされた。それは互いに影響を与える大宇宙・小宇宙の関係で、その中において太陽は人間の生涯の運命をも決定できる支配力を有し、月が太陽の補佐をすると考えられ、特に星は惑星たちの位置関係を示すことで人間へ正確に運勢を伝える橋渡しの役割をもつと結論づけた。

¹⁰ 自然の法則を超えていて、常識や理性、理論では説明がつかない人知を超越した存在。

¹¹ 此岸の世界と並んで精神的にはそれと厳密に区別された世界。

¹² チューリヒ大学元教授。ベルン大学でドイツ文学、英文学、歴史学を学ぶ。

¹³ ドイツの哲学者、マールブルグ大学元教授。キリスト教神学のみならず哲学・比較宗教学にも多大な影響を与えた人物。

¹⁴ テキストとしてはハインツ・レレケが編者となった『グリム童話』第7版決定版（1857年）のレクラム版を使用する。Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Band1, 2. Stuttgart 2016. 日本語訳としては金田鬼一訳『完訳 グリム童話集全5巻』岩波文庫、1979年を参考にした。

¹⁵ グリム兄弟が『グリム童話』を収集するにあたり、ドイツ民族のものを集めることをはじめは念頭に置いていた。またグリム兄弟が改版をするにあたり、好き勝手に改版をしたのではなく、より正しい姿に近づけるために行っていたことから、最終改訂版にあたる第7版をテキストとして使用していく。

¹⁶ 大野寿子著『黒い森のグリム ドイツ的なフォークロア《普及版》』郁文堂（2010）15頁。

¹⁷ 『グリム童話』の通し番号。Kinder- und Hausmärchen からKHMと略記。

¹⁸ KHM1, 3, 4, 5, 6, 10, 11, 13, 15, 16, 17, 18, (19), 20, 21, 23, 24, 25, 28, 29, 30, 31, 36, 37, 40, 42, 45, 47, 50, 51, 52, 53, 56, 57, 61, 64, 65, (68), 71, 76, 79, 80, 81, 83, 85, 88, 89, 90, (91), 92, 94, (96), 97, 100, 101, 106, 107, 111, (113), 114, 116, 119, 121, 124, 125, (126), 127, 129, 132, 134, 135, 136, 137, (138), 141, 145,

147, 149, 150, 152, 158, 159, 161, 165, 166, 170, 171, 172, 178, 179, 181, 182, 183, 186, 191, 193, 195, 197, 200, 201, 206

¹⁹ KHM1, 4, 5, 6, 11, 13, 15, 17, 11, 18, (19), 20, 23, 25, 28, 29, 30, 31, 40, 42, 50, 51, 52, 61, 64, 65, (68), 71, 79, 80, 81, 85, 89, 94, (96), 97, 100, 101, 107, 111, 114, 116, 119, 121, 127, 132, 134, 135, 136, 147, 149, 150, 152, 158, 161, 165, 170, 178, 179, 181, 183, 186, 193, 195, 197, 201, 206

²⁰ -chenは縮小語尾。

²¹ 大野寿子 (2010) 55頁。

²² KHM1, 5, 6, 11, 24, 25, 29, 30, 51, 57, 71, 76, 79, 80, 90, (91), (96), 97, 101, 116, 136, 178, 183

²³ KHM57, 90, 101, 116

²⁴ マックス・リュートイ (2017) 100-110頁。

²⁵ ギリシア神話に登場する上半身が人間の女性、下半身は鳥の形をした海の精。

²⁶ 小黒康正『水の女——トポスへの船路——』九州大学出版会、2012年、3頁。

²⁷ 小黒康正 (2012) 24頁。

²⁸ 小黒康正 (2012) 73頁。

²⁹ 古代ギリシア文学の長編叙事詩。

³⁰ 小黒康正 (2012) 19頁。

³¹ 小黒康正 (2012) 4頁。

³² 12世紀から16世紀までの400年間に変遷を遂げながら次第に成立、書き残されたことは定かである。小黒康正 (2012) 26頁参照。

³³ 人間の男と結婚することで魂を獲得する水の女の物語。小黒康正 (2012) 26頁参照。

³⁴ 小黒康正 (2012) 26頁。

³⁵ 小黒康正 (2012) 29-30頁。

³⁶ 小黒康正 (2012) 20-25頁。

³⁷ 小黒康正 (2012) 9頁。

³⁸ 小黒康正 (2012) 3頁。

³⁹ 小黒康正 (2012) 21頁。

⁴⁰ 「非合理的」という概念は、何か漠然としたもの等という意味では用いず、例えばその深さゆえに明瞭な解釈のできないある不思議な出来事について「そこに非合理的なものがある」という言葉の使い方に従って使用する。

⁴¹ ルドルフ・オットー (久松英二訳)『聖なるもの』岩波文庫、2010年、11頁。

⁴² この「聖なる」という言葉はせいぜい実践の必然性あるいは普遍妥当の拘束性といった意味でしか考えられていない。ルドルフ・オットー (2010) 19頁。

⁴³ ルドルフ・オットー (2010) 21頁。

⁴⁴ ルドルフ・オットー (2010) 28頁。

⁴⁵ ルドルフ・オットー (2010) 33頁。

⁴⁶ ルドルフ・オットー (2010) 75頁。

⁴⁷ 小黒康正 (2012) 24頁。

⁴⁸ 小黒康正 (2012) 52頁。

⁴⁹ マックス・リューティ (2017) 27-32頁。

Eine Betrachtung zwischen Wasser und Menschen im Grimms Märchen ——Der Wassergeist als ein unaussprechliches Wesen——

TAKAKURA, Yuki

Abstract:

In diesem Artikel werden die Wörter analysiert, die in Grimms Märchen in Verbindung mit Wasser stehen. Es wurden 101 Märchen und 27 Wörter mit Bezug zum Thema Wasser gefunden und diese Wörter wurden in die Kategorien Wetter, Umwelt, Redewendungen, Aufgaben und übernatürliche Wesen unterteilt.

In den Märchen mit übernatürlichen Wassergeistern fängt die Nixe die Hauptfigur in einem Teich oder Quelle. Die Handlung bezieht sich auf den antiken griechischen Mythos der Sirene, dem Ursprung der Nixe. Ein Mann wird durch die schöne Stimme und die Intelligenz der Sirene bezirzt. Die antike griechische Kultur und das Christentum mischten sich jedoch und so wandelte sich auch der Mythos: Die Sirene fasziniert den Menschen nicht mehr nur mit ihrer schönen Stimme, sondern auch durch ihr schönes Aussehen.

Die literarische Tradition des Wassergeistes erfuhr somit in Mitteleuropa eine Transformation. Wenn man durch den Wassergeist ins Wasser schaut, bedeutet dies, dass man in ihrem Inneren sich selbst begegnet. Die Figur des Wassergeistes lässt sich mithilfe der Ideen von Rudolf Otto interpretieren. Der Wassergeist erschreckt die Männer des Landes, zieht sie gleichzeitig an und zerrt sie ins Wasser. Otto zufolge fasziniert ihn der Wunsch, die unmenschliche Existenz, „das Numinöse“ wie den Wassergeist, in sich zu integrieren. Man kann durch „das Numinöse“ nicht nur eine andere Welt betreten, sondern auch eine innere Welt.